

光信公ゆかりの地紀行4

種里城と古戦場 光信公戦記



戦国時代初めの延徳3年（1491）、南部光信（後の大浦光信）は、32歳で故郷の岩手県久慈を離れ、鱈ヶ沢町種里城に入部しました。当時の種里城は、日本海沿岸から津軽平野への侵入をもくろむ安東氏との攻防の最前線。赤石川下流にはさまざまな敵対勢力がひしめいていたと考えられます。舞台はいよいよ戦乱の種里へ。今回は、種里八幡宮「奈良家文書」などによって伝えられる光信公ゆかりの古戦場を訪ねてみましょう。

たとわれます。光信は館前館を攻めましたが、館には水を満たした堀があつて軍勢を寄せつけません。実はそれは水ではなく、城主の奥方が機転をきかせた策だったので。光信の家臣・奈良主水貞親（後の種里八幡宮初代宮司）は見事その策を見破り、一挙に館前館を攻め落としたとされます。館前館は、赤石川と津軽沢に面した急峻な地形を利用した天然の要害で、さらに後方を守る二重の堀が今も残っています。

■館前館攻略

種里城から赤石川を約4km下った館前館の城主・対馬氏は、海へ出ようとする光信の行く手を阻み、矢を射かけ

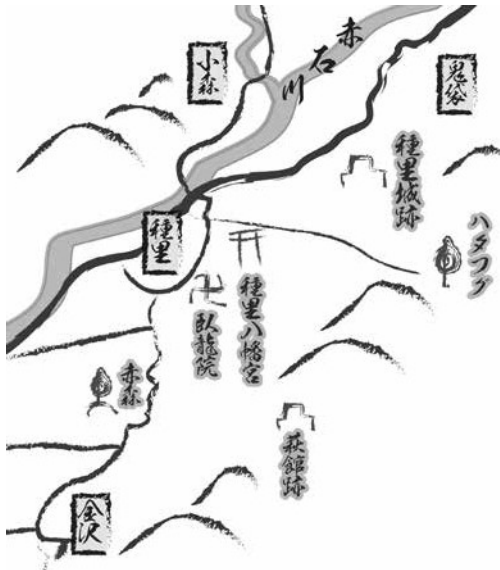
■萩館の合戦

一方、光信は、種里とは目と鼻の先の萩館の城主からも攻撃を受けていま

した。萩館は、種里と南金沢の村境の丘陵にあり、人工的な平坦地や堀などが広範囲に残る大規模な城郭です。光信の命をうけた奈良主水は、軍勢を二手に分け、前後の門から萩館を強襲。火を放ち鬨の声をあげて攻めかかると、城兵はあわてふためき、わずかの時間で落城したとされています。この他、萩館付近の旧街道沿いには、立派な根上りの赤松が生えている「赤森」という塚があります。種里城への入り口を守る木戸（門）があつたとされる場所、松は光信により手植えされたものと伝えられています。昭和50年代には場整備される前までは、この塚の所で道路が折れ曲がり直進できないルートになっていました。敵の侵入を防ぐための柵形があつた名残とされており、この一帯が緊迫した戦闘地域であつた時代の面影をしのぶことができます。

■種里八幡宮と切明道

奈良家文書によると、館前館や萩館の城主によって海への道を閉ざされていた光信は、種里八幡宮から山越えして深浦町関へ抜ける「切明道」を開いたとあります。道沿いには通称「ハタフグ」の松があり、光信の軍勢が旗や鉾を立てかけて休んだという伝承地にもなっています（松は残念ながら令和元年に強風で折れてしまいました）。奈良家文書は江戸時代になって書かれたものですが、少なくとも当時伝わっていた光信公にまつわる伝承を記録した史料として注目できます。光信が種里城に入った当時、近隣には敵対する群雄が割拠し、さらに西の大敵である安東氏が迫ろうとしていました。次号、光信がその生涯を過ごした種里城から、津軽藩誕生への物語が始まります。（町学芸員 中田）



種里城周辺の史跡（白神赤石道中絵図より）



館前館の二重堀（館前町）



萩館を攻める光信公の軍勢 切り絵「光信公一代記」(長尾金之助作)



赤森（種里町・南金沢町の境）